

住み慣れた地域で ずっ~と 暮らしたい



高齢となり身体に不自由をきたしても、住み慣れた街で自分らしく暮らしたい。住まいの問題は親の介護、いずれは自分たちのこととして、誰にでも降りかかってきます。今回は地域での新しい取り組みをレポートしました。



しんあい清戸の里全景

この8月清瀬にオープンする「しんあい清戸の里」は地元で長年、福祉医療を進めてきた「信愛病院」を運営する社会福祉法人信愛報恩会

注目される

「サービス付き高齢者向け住宅」

医療・介護に関わる「2025年問題」、団塊の世代が75歳を迎える2025年になると、3人に1人が高齢者となる超高齢社会を迎えます。そのことを見据えて今、注目されているのが、「サービス付き高齢者向け住宅」。施設でも病院でもなく、自宅と同様に自由な生活を送りながら、必要な介護を受けられる住宅のことです。

が、地域の人々の老後の支えとなるべく開設するものです。清瀬市下清戸の緑豊かな場所に、サービス付き高齢者向け住宅が完成間近。こちらの特徴は同じ建物内に、信愛訪問看護ステーション、通い、必要な訪問介護・看護、泊まり（ショートステイ）ができる複合型ケア、そして認知症対応型のグループホームも併設されていること。医療介護付として東京都のモデル事業です。



訪問看護ステーション「ほほえみ」の車

つまり、2階と3階にある住宅に居住すると、24時間365日常駐スタッフによる見守りサービスがあり、1階に併設されたさまざまなサービスも必要に応じて受けられるのです。「概ね60歳以上の方なら、介護認定の有無に関係なく、入居できます」としんあい清戸の里開設準備室長の難波眞さん。



開設準備室長の難波眞さん

2階と3階に計42の居室があり、各階に食堂、共同浴室、ランドリー、娯楽室が完備。1階中央には地域交流室があり、地域の人々と交流できる場になっていてカフェやシルバークレッジ等が開かれる予定。

「清瀬市の高齢化率は殊に高く、

人口の26%が高齢者といわれます。住み慣れた街で、住み慣れた部屋でずっと暮らしていただくために、心のこもったサービスをしていきたい」と新規事業に意欲を燃やす難波室長。オープンを前にすでに、広いタイプの居室は予約で満室状態（キャンセル待ち）ということからも、信愛病院への信頼と、必要とされている住宅だということが分かります。

最期まで自分らしく暮らせる 「もうひとつの家」

小平ではこの4月にNPO法人ホームホスピス武蔵野「棟」(YUZURHAN)が開設されました。小金井市にある桜町病院聖ヨハネホスピスの遺族会のメンバー、嶋崎叔子さんと犬飼桂子さんが中心となり、立ち上げたもの。ホームホスピスは病院や介護施設ではなく、住み慣れた地域の民家を活用し、利用者が自分の家のように最期ま

Aタイプ (広さ 18㎡) 家賃 63,000 円
Bタイプ (広さ 25.2㎡) Cタイプ (広さ 25.09㎡) 家賃 80,000 円
共益費は共通 19,800 円、基本サービス費は共通 37,905 円+税 家賃+共益費+基本サービス費が固定費 入居時保障金家賃3カ月分 (他に食費1日3食×30日の場合 45,150 円+税)
(問) 042 (493) 5623
しんあい清戸の里開設準備室



普通の家のような玄関

で安心して暮らすことを可能にした取り組み。2004年、宮崎の「かあさんの家」が始まりで徐々に西日本へ広がりますが、NPO法人としてのホームホスピスは小平での取り組みが東京初となるものです。嶋崎さんは22年前、桜町病院聖ヨハネホスピスで母を看取りました。最期の1ヶ月、ホスピスに泊まり込み、母と穏やかな時間を過ごした日々を思いだすと「今もふっと柔らかい気持ちになる」といいます。その時、お世話になったのが当時同院のホスピス医であった山崎章郎さん。「このご縁があったからこそ、その後20年かけて山崎先生と看護師さんたちと信頼関係を築くことができ、たどりついたのがこの



暮らしの音と匂いに満ちたダイニング



広い窓の明るい居室

ホームホスピスだったのです」と嶋崎さんは振り返ります。遺族会の世話人として関わりながら、介護福祉士の資格も取得。2005年に山崎先生が立ち上げた「ケアタウン小平」内のデイサービスセンターでは5年間、入浴介助のボランティアを経験しました。「人生の最期をどのように迎えるか」インドに渡り、マザーテレサの「死を待つ人々の家」でもボランティアをし



理事長の嶋崎さん(左)と伊東さん

たという行動力の持ち主。宮崎と神戸のホームホスピスでも研修を積みました。行き場がなく途方にくれている方たちに、我が家ではなくとも、自宅に近い第2の我が家を作りたいと、昨春から8か月間にわたり物件探し。けれども趣旨は理解してくれるものの、「亡くなる人がでるんでしょう」と断られ、時には「出て行け」と追い払われたことも。「もうダメ？」と思いかけた途端、奇跡のようにインターネットで見つけたのが、現在のマンション1階。理解あるオーナーに出会えたのです。改修費は民間財団の助成に応募してまかなえましたが、当面の家賃等の資金はゼロ。嶋崎さんと犬養さんで出資し、遺族会代表の方やNPO法人理事からの寄付金でスタートしました。全国でも珍しいマンション型のホームホスピスは広さ125㎡、6畳または4畳半の個室に5人の利用者が入れます。看護師、介護福祉士等の専門

特集

〈利用料金〉

- ・ 契約金 300,000 円
- ・ 生活費 (室料・共益費・食費等) 130,000 円～150,000 円
- ・ 生活支援費 (介護保険外の介護費用 介護度によって変わる) 80,000 円～120,000 円
- ・ 短期利用 18,000 円 / 日

小平市学園西町2丁目12-19
Tel/Fax 042 (315) 8152

職員が24時間常駐。これまでのつながりあるスタッフ7名がシフトを組んでケアにあたります。

玄関にはゆずりはが活けられ、中央にはリビングダイニング。友人宅を訪問したような生活感と温もりがあります。95歳になるという利用者さんがソファでゆったりと、昼下がり過ごしをいらっしやいました。居室は窓が広く、明るく開放的です。

「地域の在宅医療を支える関係者と連携し、大切ないのちに寄り添える場をつくること。昔のように最期は家で看取るという『看取りの文化』を地域の人々と取り戻したい」と語る嶋崎さんの20年をかけた思い。ここを拠点にして、地域の協力で新たなムーブメントがおきてほしいものです。

訪問介護

事業所の今

一般の家にホームヘルパーを派遣し、訪問する側の「あかしあ訪問介護ステーション」(小平市)の代表、石島武さんにも伺いました。食事、入浴、排泄などの介助を行う身体介護サービス。掃除、洗濯、食事作りなどの生活援助サービスを提供しています。利用者はやはり一人住まいの方が7割を占めるそうです。我が家で暮らしたいと願う高齢者にとって、ホームヘルパーさんの存在は必要不可欠のものですが、超高齢社会が進むにつれ、今後ますますヘルパーさん不足が懸念されます。

「ヘルパーの資格は取るが介護職には就かない、就いてもすぐやめてしまう傾向にあるようです。理由は待遇と労働環境にあるのでしょう。私はぜひともこの2つの改善を目指して、今後優秀な介護職員を揃え、求められるサービスを提供したいと思っています。『企業は人なり』というのは訪問介護事業所も同じですね。石島さんのような方のパワーが今後期待されます。

☎042(208)6465
小平市学園東町1-4-18 カーサイトウ101

介護の味方、手作り情報紙を発行

在宅介護を支える介護用品、福祉用具の販売とレンタルを幅広く手掛け、この5月で創立26周年を迎えた「株」ホームケアセンターイワサキ(清瀬市)が発行する手作り情報紙をぜひ紹介したい。

『ほっとホット便り』というB4判2つ折りでモノクロ、季刊で年4回発行の小さな情報紙ですが、介護用品を使う人、介護する人にとって、実有益で親切な情報が満載。「福祉用具は自立を促すためにあるのですが、使うことでこういう効果があることを知ってほしいので」というのは情報紙作りを担当する社員の井比美三子さん。自身も福祉用具専門相談員、おむつフィットター3級を持っています。おむつフィットターとは排泄ケアのスペシャリスト。大人用の紙おむつだけでも国内で800種類くらいあるとか。その

人の身体状況に合った紙おむつを選ぶことが大切で、今年1月発行の第6号では紙おむつの種類や、あて方の特集を組みました。

今春の第7号は「特集 外に出よう」散歩の効用とその際に使う、靴や杖、歩行車の種類やアトバイスが写真やイラスト入りで掲載され、使う人の立場に立った優しさが紙面から伝わってきます。「役に立った」という読者からの声が一番うれしい。岩崎悟社長のコラム、用具を使う写真モデルも社員、社をあげての手作り感も地元ならではの。会社PRの情報紙ではないことが分かります。「この便りが、在宅で介護を担っている方々にとって、情報の中継点になってくれればいいですね」と井比さん。利用者さんへの送付のほか、病院施設等へ置いてあります。

☎042(492)3522
清瀬市中里3-11118-1



「ほっとホット便り」第7号ご希望の方はお問い合わせください。



ショップ内で、井比さん